書評

編集・発行
関西大学生活協同組合
組織部
「書評」編集委員会
編集人　田村民夫

吹田市千里山17
TEL 388—1121
内線 7 7 6

関大アカデミーの創出へ向けて
原稿募集
「書評」編集委員会

変革主体への考察

内田芳明著「ウェーバー社会科学の基礎研究」

石尾芳久

本書はマックス・ウェーバーの社会科学理論に関する本格的な研究であり、わが国におけるウェーバー研究の最高の水準を示す著作の一といい得るであろう。この紹介においては紙数の制約もあるので第二章の「社会層と宗教倫理の相関」を中心として考察することとする。右第二章で提起されたウェーバーの「社会層」概念の特色は、マルクスとウェーバーの関連について考察すべき重要な論点をふくむ。ウェーバーがなぜマルクスのごとく「階級」とだけ言わないで「社会層」という概念を前面におし出しその中に「身分」をふくませたかという問題について「社会層」概念に変革の主体への考察を導くという効用があり、したがってまた、変革の主体に関する時味深めることにより、たとえばアジア的社会の停滞性・変革を不可能ならしめる固定化・停滞化の諸条件の考察を導くという効用がある、と内田氏は指摘される。これは重要な指摘である。ウェーバーは、階級について財産階級、営利階級、社会階級の三種を区別しているが、階級利害関係人の結社（階級団体）が成立するかぎりそれは必然的に成立するというわけではなく、とくに財産階級にもとづく社会編成の内部では階級対立は存在しても階級闘争も階級革命は必しも導かれない、としている。ここに変革の主体への考察も、他方両者が対極をなす場合の主体は「支配の諸類型」として改めて問い返さるべき問題であると考えるのであるが、内田氏は、この「社会層」概念に単なる媒介にとどまらずして基礎概念たる意味を認められるのである。内田氏が身分と階級との間に流動的な一面があることを指摘されながらこの「社会層」概念が変革の主体の考察にとって重要な指摘であるとされるのは、理由

「社会層」概念の展開

マルクス「階級」概念との関連の重要な視点

が重要な意義を有する所以があるのである。

この意味において、私は、ウェーバーの「社会層」概念はわれわれをして変革の主体への考察にすすめしめる媒介概念であり、変革のあることを指示されるのは、理由

のあることである。身分の強化は変革の阻止条件となり、社会の停滞化を意味する、とされる。

ただし、身分の問題を封建的身分に即して考えるならば、それは必ずしも変革の阻止条件となるものではなく、また社会の停滞性を意味するものでもない。そこに封建制と家産制の本質的な相違という問題がある。封建的身分はそれが社会の多元的力関係に対応し得るという意味において変革の主体となる場合がある。（家父長的）家産制においては身分はその複雑な階層化にも拘らず政治的力を喪失していることに多い。したがって身分の強化は社会の停滞化を意味するとはいえないのであり、様様の身分のもつ政治的力を弱化せしめることが家産制の専制的支配のねらいである。

ウェーバーが身分と階級を総括をする概念としての「社会層」を提起したのは多元的諸関係を可能にする根拠として変革の主体を考察する時味深めることにより、それは重要な指摘である。ウェーバーは、階級について財産階級、営利階級、社会階級の三種を区別しているが、階級利害関係人の結社（階級団体）が成立するかぎりそれは必然的に成立するというわけではなく、とくに財産階級にもとづく社会編成の内部では階級対立は存在しても階級闘争も階級革命は必しも導かれない、としている。ここに変革の主体への考察

配であり、とくにその伝統的官僚制が諸身分の多様性は政治的活動を抑制するについて効果をあげ得ることをウェーバーは立証した。官僚主義に対するウェーバーの深い関心をかかる観点にもとづいて把握しなければならないのではなかろうか。近代社会においては官僚制と議会・政党の力関係を根拠として変革の主体の問題が時味されているのである。

内田氏は、資本主義の成熟していく社会経済秩序のなかで発生する「新中間層」というウェーバーの指示を重視される。それは社会階級であるが身分ともっとも近い。この「新中間層」は「中間階級」であり（1）独立の農民、手工業者、（2）官公及び私企業の）官僚（3）教育能力による自由職業（弁護士、医師、芸術家）、（4）教育職能的独占的労働者であり、「中産階級」とは別個の概念である。しかるに、内田氏は、中産階級の中の若干は営利階級の中の中間階級たり得るというウェーバーの言葉を重視して両者の相関面に注目されているようである。これは「身分」概念に重い意味をこめられる氏の方法を示唆するもの、と思われる。しかし中間階級の指摘の真の意味は、近代社会における多元的力関係を示唆するとともに、解すべきであって、変革の主体としての官僚制や政党といった諸団体を媒介するところのその目的があと解し得るのではなかろうか。支配の諸類型に即して改めて問い返されねばならないのであって、中間階級がその主体変革の主体として把握されるはずはなかろう。

しかし、内田氏は、近代社会における新身分の意義を重視されるのであり、そこに「めぐまれない社会層」――「被圧迫社会層」に変革の主体を求められる理由がある、氏によれば、変革の主体は「社会層」一般ではなくして「虐げられた社会層」のみである、ということになる。しかし、もしそうであれば、マルクスの「階級」概念に対して殊更に「社会層」概念を提起した所以がどこにあるかという点が疑問となるのである。この疑問に対して、内田氏の「社会的特権層は、このような救済宗教を必要とせず、そのよう苦難の神義論をいささかも必要とせず、そのかぎりにおいて反宗教的、無宗教的であるが被抑圧層のばあいにはこれに対してその切実な物的（外的）ならびに精神的（内的）利害関心状況のゆえに、それじしん達人宗教性の固有の領域から創造され提出されている思想（苦難の神義論や宗教倫理）に結びつく積極的可能性があること、ここにウェーバーは着目しているように思われる。」という叙述は、その解答を示したもの、と考えられる。すなわち、被抑圧層と宗教倫理の結合の積極的可能性が、被抑圧層をして変革の主体としての方向に推進せしめるのであり、そこにマルクスの理論を補完する意味があり、とされるのである。しかし、ウェーバーが、たとえば旧中国の儒教倫理を問題とした一の観点は、それが被抑圧層の結社への動向、すなわち変革の主体への発展を阻止する作用を果していることを明らかにする点にあったのではないか。そのような事態では、被抑圧層を宗教倫理―儒教倫理から解放することが何よりも肝要であるというのが「儒教と道教」の結論である、とされる。ウェーバーのプロテスタンティズムの倫理と儒教倫理とのきびしい対比も、かかる趣旨において理解されねばならない、と私は考える。

それでは「社会層」と宗教倫理の相関の問題は如何になるであろうか。

さきにウェーバーの階級利害関係人の結社（階級団体）は必然的に成立するものではないという見解を紹介した。ウェーバーの「支配の社会学」や「法社会学」「国家社会学」は、如何なる権力の仕組みがそのような結社（階級団体）を可能にするかということ、いわば人民の自律的組織の可能性を権力の仕組に即して深求した研究であるといってよい。人民の日常的な自律的組織の可能性とは、日常的な自律的行動の可能性であり、ウェーバーが資本主義の精神の問題として、プロテスタンティズムの倫理を考察したのは、人民の日常的な自律的行動の可能性を精神史の面から検証しようとした試みといえないであろうか。そこに、強固な物質的利害関心を有する営利階級に禁欲倫理を結合せしめた――結合することを立証した理由が存する。それは被抑圧層のみならず多様な社会層が自律的組織を確立し得ることを精神史の面から的確に証明したことを意味する。その意味においては歴史的意義を明かにすることで充分であって、プロテスタンティズムの倫理や資本主義の精神の現代的意義までを問題にする必要はない。

内田氏の「宗教思想が社会層を獲得するためには思想は社会層の利害関心と結合しなければならない。このようにウェーバーが、理念は社会層の観念的は「からでなく物質的利害関心と結合しないかぎり歴史において無力である、という命題を徹底的に承認し、かつ方法的にも実際的にもそれを検証に使いなし、歴史現象の理解のなかで方法的に貫徹させていることは言きれもなき事実であって、この点でウェーバーが弟子というのは、階級闘争の果す基本的役割を確認したというところにその意味があるのであって、ウェーバーの場合には、百年に一回といった非日常的な闘争――というと叙述は、それ故、改めてはなくして、日常的な闘争が――それを可能にする支配の類型が、あくまでも中心課題となっている

含む。マルクスは、物質的利害関心の自律固有なる階級に、精神の自律性―倫理性を認めたのであろうか――はなお疑問である。ウェーバーの禁欲倫理と物質的利害関心結びつき立証という方法は、マルクスの方法と最も異なるところである。むしろ、変革の主体の多様性―人民の自律的組織の多様性を問題にしたという点に、ウェーバーの方法の真義があるのであり、資本主義の精神の研究も、そのような課題の一環を精神史の歴史的意義に即して解明しようとしたのであって、この点に尽きるといい得る。それ故、ウェーバーがマルクスの弟子というのは、階級闘争の果す基本的役割を確認したというところにその意味があるのであって、ウェーバーの場合には、百年に一回といった非日常的な闘争――というと叙述は、それ故、改めてはなくして、日常的な闘争が――それを可能にする支配の類型が、あくまでも中心課題となっている

のである。変革の主体や精神史への深い配慮もかかる角度から吟味されなければならないであろう。

以上、内田芳明氏の卓越した研究に接し、教えられるところ多きことを謝しつつ私の疑問とするところを卒直に記した。今後、学生諸君とともに、本書を手引として「ウェーバー研究を深めていきたい」と思っている。（内田芳明著「ウェーバー社会科学の基礎研究」岩波書店、二二〇〇円）

筆者石尾芳久氏　法学教授

著書「日本古代法の研究」（法律文化社）「日本古代の天皇制と太政官制度」（有斐閣）「海南政典、海南律令の研究」（法律文化社）、訳書マックス・ウェーバー「法社会学」「国家社会学」（法律文化社）

注文制に踏み切る企業防衛的方法として

未来社

戦後23年、出版界は、コマーシャル・ペースに乗って商品化を強調するマス・プロ、マス・セールの現象が大きく呈している。この中で巨大資本による大量出版の大手出版社と、中小出版社の両極分解現象は出版業界の構造ありこの方向が次第に顕著化してきている。

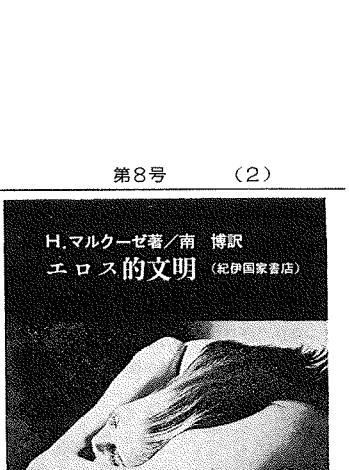
河出書房の倒産事件を契機に、出版業界の内部の矛盾が現在露呈している。そして業界はこの矛盾の「解決化」に真剣に取組む必要性を痛感しており、とりわけ中小出版社の一つのテストケースとして未来社が十月一日から特別契約店制度という方法で注文制実施へ踏切った。

この現行の委託制から買切制へと一歩踏み切った要因は現在の中小出版社に共通の問題が横たわっている。

現在、流通機構は異常に大きい返品率によってその機能が阻害されているといった返品問題に端的に問題が示されているといえよう。

今日返品問題は、出版社のみならず取次、小売店にとっても正常な業務活動に〝大きな阻害物〟となっており、返品処理は取次ではルの現象が大きく呈している。この中で巨大資本による大量出版の売店では熟練した店員が返品整理に没頭するという現象が優性化してきている。

この返品業務による取益率の低下という点では、出版社、取次、小売店それぞれに特殊な内部要因があり、問題の解決は容易ではないだろうが三者には一定程度の共通する問題があり、そこには現行の委託制の下でマス・プロ、マス・セールといった大量出版を巨大資本下で慣行する大手出版社と、資本力の弱い中小出版社の格差が生じ、この格差は出版業界の内部の矛盾を深化させる



疎外とエロスに加えられた支配力か

八木俊樹

あのひとは恥部。わたしは性器をくぐって、手首にうずくまって潜んでしまった眼。胎児のようにうずくまって、内側から世界を閉じてしまった。あのひとは嫉妬と憎悪の眼で、淫乱の世界と汚濁の肉塊を嬲い放しと自瀆する。興奮の曾個のやさしい形態でわたしの淫欲の欲情に接近する。でもあのひとはわたしに接吻しない、触れない。あのひとは欲情に引き裂かれるのが怖かった。それともあのひとのやさしさは善悪の形態で苦しく蔑えていたのでしょうか。胎児は何という羨望、うずくまった胎児のあのひとを孕む処女俵胎分娩ってきす、交媾の叫びもあげず。だからわたしは生きていないわたしの肉体をしての情熱と生活への扱い、あのひとはそんな悲しみに濡れたがったの。狂ってしまう、自瀆する婦婦のあわれに、ばらばらに解体した肢体に、そのときあのひとは触れられなかった女のうちがかしい姿態とそのめくるめくの空間に、たおやかのしなつくりてのをのこまつ婦婦の女となる。

男と女がいる、ただそれだけで性の欲びがなければならぬ、チャタレイ婦人をかいたときのロレンスの恐ろしい観念は、清教徒精神の爆発であるのだが、フロイト思想はそんな観念を肉部から破壊する様に思える、陰惨心理と感情、自瀆の禁庭に纏いつかぬ性などあるもの、凌辱と強姦、ナルシズム、すべてエスの領域に重圧されている最々しい衝動の反映あるが倭に在る現実の形態ではないか、そんなふうに云っている様だ。彼は性の欲びとかエロス的文明とかを信じたのではない。彼が信じたのは、性は病的にしか、陰惨な諸形態の他にあり様はないということだ。それは異常な観念だきまるかもしれぬが、彼の頭を捉えて離しはしなかったのであり、彼はそのことを信じていた。あのひと（＝神）さえもうすぐまった性と心理にうっぬかれていて、幻想の瞑父の超越命令をして人間を強迫神経症に変換せしめるが、おのれは膨れあがった子腹のをのこまつ女あるは、多形性倒錯の小鬼のようにエ宮への退行を意識していたではないか、と、フロイトはそんな観念に隠蔽している自体を自虐するために、心的構造の巨大な極態集積を解析したのかもしれぬ。が、解析の果てに彼を襲った苦痛は、疑ひもなく、おれは性のそっとするような外在する現実を許すために解析したのか、それとも恐怖の理にかなしむためにか、という苦々しい想いだったのはずだ。

フロイトはおのれの頭脳を一の実験装置とする。むろん、それはエロスであって、様々の心的過程をもつ人間をエスという（場）に捉ほらうどんで、その運動から心的構造を推理する。自我、超自我、前意識といったものも（場）のエネルギーとなるのであって、絶対的時間・空間という古典的観念を拒絶した相対性において推理する。しかし、フロイトの連続体は、皮肉っていえば、エスに固着し、超自我に侵触されて現実原則を受けれた生活のみを借りていたかったのかもしれぬ。僕はそんなフロイトが好きなのだ。

マルクーゼは、フロイトを問題とするならば、生命体はただ存在しているというそれだけの理由で原生的に疎外されていて、したがってその疎外の否定として存在しているフロイトの理論では生命衝動（性衝動）と無機的自然への死の衝動であるそれが、どのようにして存在体を貪欲して諸形態を分化せしめかたという姿勢を問題とすべきであった。もし批判するならば、フロイトの相対性が古典的力学の観念に偏位されたために、見のがしたり誤解した問題を彼の方法意識にまで遡元した上で批判すればよいのだ。マルクーゼが貴いのは疑えぬ。彼はエス領域をエロスで塗りつぶす。したがって抑圧・疎外はどこからくるのか、外的に、どこか他の所からくるほかない。それ故彼は、フロイトの抑圧とこの現実原則を人間が永遠にでもく上に必要な、本能の変容と、欠乏による生存競争が強いるのだとする。しかし彼はそれを認めなかったのだ。

「本能は、現実原則の影響によって抑圧されず変形をこうむる、という彼の分析は、ある特定の歴史的形態としての現実を、純一正現実へと一般化するものだ、と批判されてきたのである。この批判は妥当である。しかし、それが妥当だからといって、フロイトの一般論に よくまれる真理、つまり、本能の抑圧的な組織は、文明における現実原則のあらゆる歴史的形態の基礎となっている、という真理を損うことはできない。もし彼が、次的な快楽原則と現実原則とは、まったく両立しないいうことで、本能の抑圧的な組織を、固定化しようとするならば、文明は、組織化された支配として道歩してきた、という歴史的事実を妄明しているのである」と。彼は支配（＝過剰抑圧）だけを認めなかったのだ。ここで彼は古典的マルクス主義に回帰するフロイトの相対性をエロスと支配という絶対的時間、空間の古典力学に変換し、疎外を、このようにエロスに加えられる支配の連続体は、皮肉っていえば、エスに固着し、超自我に侵触されて現実原則を受けれた生活のみを借りていたかったのかもしれぬ。僕はそんなフロイトが好きなのだ。

マルクーゼは、フロイトを問題とするならば、生命体はただ存在しているというそれだけの理由で原生的に疎外されていて、したがってその疎外の否定として存在しているフロイトの理論では生命衝動（性衝動）と無機的自然への死の衝動であるそれが、どのようにして存在体を貪欲して諸形態を分化せしめかたという姿勢を問題とすべきであった。もし批判するならば、フロイトの相対性が古典的力学の観念に偏位されたために、見のがしたり誤解した問題を彼の方法意識にまで遡元した上で批判すればよいのだ。マルクーゼが貴いのは疑えぬ。彼はエス領域をエロスで塗りつぶす。したがって抑圧・疎外はどこからくるのか、外的に、どこか他の所からくるほかない。それ故彼は、フロイトの抑圧とこの現実原則を人間が永遠にでもく上に必要な、本能の変容と、欠乏による生存競争が強いるのだとする。しかし彼はそれを認めなかったのだ。

「本能は、現実原則の影響によって抑圧されず変形をこうむる、という彼の分析は、ある特定の歴史的形態としての現実を、純一正現実へと一般化するものだ、と批判されてきたのである。この批判は妥当である。しかし、それが妥当だからといって、フロイトの一般論に よくまれる真理、つまり、本能の抑圧的な組織は、文明における現実原則のあらゆる歴史的形態の基礎となっている、という真理を損うことはできない。もし彼が、次的な快楽原則と現実原則とは、まったく両立しないいうことで、本能の抑圧的な組織を、固定化しようとするならば、文明は、組織化された支配として道歩してきた、という歴史的事実を妄明しているのである」と。彼は支配（＝過剰抑圧）だけを認めなかったのだ。ここで彼は古典的マルクス主義に回帰するフロイトの相対性をエロスと支配という絶対的時間、空間の古典力学に変換し、疎外を、このようにエロスに加えられる支配の連続体は、皮肉っていえば、エスに固着し、超自我に侵触されて現実原則を受けれた生活のみを借りていたかったのかもしれぬ。僕はそんなフロイトが好きなのだ。

マルクーゼは、フロイトを問題

フロイトはエスの生命衝動と死の衝動から心的構造自体の疎外を徹底して貫ぬいた。マルクスも亦、人間は自然の一部であるが、人間が自然外的関係にはいるならば、人間は自然を非有機的身体とし、自然は人間を有機的自然とするという根源の疎外をすべての考察の基体にしたのだ。自己を疎外しそれを否定するがまたしても疎外―疎外の否定であるという存在が生きているということなのだ。

◇　◇

おれの脳すいに白き姿態の女が横たわっている、驚然とした嘔吐で同衾をせまる、あるいは白きうなじをうつむきであえかの欲情に恥入っている。おぞましの、そのことなるは。おれは処女だった、彼女を愛らなく愛していた。が、ある夜突然、夢魔が襲った。不快と疼くような陶酔が脳すいを攪拌して、女は凌辱された。おれは犯されて弟となった。おれは復讐のため、不倫の女を膨れあがった下腹を圓潤する、少女のはそむ肢体から恥部をひきだす：が、皮膚にべっとりとはりついた不快と湿潤の疲れのなかでふと思う、あれは女ではない、おれを犯したのは女ではない、そうではなく、頭のなかに手淫の形態でべっとりとしたあれは、何なのかと。

僕は思うのだ、国家に対する憎悪は何からくるのかと。自らの処女性を侵蝕した魔性性の復讐のためか、いやそうではない、私的な心理の歴史としては正当かもしれぬが、そうではないのだ。

フロイトの体系は、心的構造が個体に還元されるならばあたらかぎり正しいが、個体、男女の一対を基底とする共同性にまで、それをおよぼすことはできないのではないか。彼はエスへの固着と自我における幻想性が、性の幻想性と逆立することを見なかったのではないか。心的構造には、性のエス―自我の位相と矛盾する共同性に対する意識―無意識の位相があって、マルクーゼも亦、古典的マルクス主義の命題でそれをやりぬけた。たとえばマルクーゼのように古典的にでなく、フロイトの相対性理論によって解析したとしたらどうだろう。

（奈良大学文学部在学中）

新しい問題意識で全体像を探る

本学から越後教授・安藤助手ら執筆

「講座・日本資本主義発達史論」

このたび、日本評論社から「講座・日本資本主義発達史論」（全五巻）が、日本資本主義発達史に関する研究で、現在もっとも注目される新進気鋭の執筆陣のもと刊行された。この講座第一巻「形成期の日本資本主義」に本学経済学部越後和典教授、安藤博助手の共同執筆論文「産業革命と資本主義の形成」が収載されている。論文の構成は、1、日本資本主義の「確立」の時期とその指標に関する諸見解、2、「産業革命」と資本主義的発展の諸特徴、3、消費資料生産部門における機械制工業の進展、4、生産手段部門における機械制工業の進展、5、明治後期における産業構造と諸階級の構成、からなっている。

なお、この構座の刊行の性格〝刊行にあたって〟でその次のように述べている。「日本では資本主義の道を歩みはじめて二〇〇年を経過した。そしていまや、さまざまの矛盾をはらみつつも世界において有数の生産力を誇る地点に到達した。この日本資本主義の研究についてわれわれは多くの遺産をもっている。経済学が科学として日本の土壌に定着してからおよそ半世紀、おびただしい量の研究が蓄積され、そのなかにあるものは忘れ去られ、あるものは学界の共通の財産となり、あるものはいまもなお研究の素材として命脈を保っている。またこの間、大小さまざまな問題をめぐって多くの論争がくりかえされてきた。論争は刺激され、論争を発条として研究の新しい展開と深化もはかられてきた、なかでもいわゆる「日本資本主義論争」に結晶される論争は今日の日本資本主義研究の源流をなしてきた。第二次大戦を終って二十数年、戦前には思いもよらなかった広がりのなかで歴史的研究と現状分析が積み重ねられた。そして研究の細分化、専門化が進行し、専門分野での価値高い労作が多く生みだされたが、一方では相互の交流と総合とが困難となり、問題意識の稀薄化と方法論的既存の矢知が指摘されるにいたっている。他方では問題意識の固定化と画一化が、実証的分析の厳しさを失なわせ、方法上の保守性と停滞とをもたらす傾向が存在し、この二つの傾向の隠蔽は日鼎著であり、社会科学の分野でしばしば問題にされている。

本学経済学部越後和典教授、安藤博助手ら執筆

本学から越後教授・安藤助手ら執筆

このたび、日本評論社から「講座・日本資本主義発達史論」（全五巻）が、日本資本主義発達史に関する研究で、現在もっとも注目される新進気鋭の執筆陣のもと刊行されたこの講座第一巻「形成期の日本資本主義」に本学経済学部越後和典教授、安藤博助手の共同執筆論文「産業革命と資本主義の形成」が収載されている。論文の構成は、1、日本資本主義の「確立」の時期とその指標に関する諸見解、2、「産業革命」と資本主義的発展の諸特徴、3、消費資料生産部門における機械制工業の進展、4、生産手段部門における機械制工業の進展、5、明治後期における産業構造と諸階級の構成、からなっている。

なお、この構座の刊行の性格〝刊行にあたって〟でその次のように述べている。「日本では資本主義の道を歩みはじめて二〇〇年を経過した。そしていまや、さまざまの矛盾をはらみつつも世界において有数の生産力を誇る地点に到達した。この日本資本主義の研究についてわれわれは多くの遺産をもっている。経済学が科学として日本の土壌に定着してからおよそ半世紀、おびただしい量の研究が蓄積され、そのなかにあるものは忘れ去られ、あるものは学界の共通の財産となり、あるものはいまもなお研究の素材として命脈を保っている。またこの間、大小さまざまな問題をめぐって多くの論争がくりかえされてきた。論争は刺激され、論争を発条として研究の新しい展開と深化もはかられてきた、なかでもいわゆる「日本資本主義論争」に結晶される論争は今日の日本資本主義研究の源流をなしてきた。第二次大戦を終って二十数年、戦前には思いもよらなかった広がりのなかで歴史的研究と現状分析が積み重ねられた。そして研究の細分化、専門化が進行し、専門分野での価値高い労作が多く生みだされたが、一方では相互の交流と総合とが困難となり、問題意識の稀薄化と方法論的既存の矢知が指摘されるにいたっている。他方では問題意識の固定化と画一化が、実証的分析の厳しさを失なわせ、方法上の保守性と停滞とをもたらす傾向が存在し、この二つの傾向の隠蔽は日鼎著であり、社会科学の分野でしばしば問題にされている。

「講座・日本資本主義発達史論」の構成

第一巻「形成期の日本資本主義」

第二巻「第一次世界大戦前後」

第三巻「恐慌から戦争へ」

第四巻「第二次世界大戦前後」

第五巻「昭和三〇年代」

各巻定価八〇〇～九八〇円、国際主義的革命家ゲバラの行動と思想を発見しなければならない」とし「七〇年への問題提起としたい」との意欲的編成方針の性格を述べている。

青木書店は、キューバ大使館日本・キューバ友好協会との協力を得て現存するゲバラの著作を集大成を目指すことで、情緒的心情的理解の仕方なく革命戦略として「ゲバラを理解しなくてはならない」との刊行の方向である。重要なポリシーとの著作は必載されることはまず不可能視されており疑問視されている。

レボルト社「国境を越える革命2」は十一月刊行、太平洋出版社「ゲバラ選集」は一〇月三日刊行、青木書店「ゲバラ選集」は十一月中旬刊行予定。

状況止揚への思想的営為

白水社から「ルカーチ著作集」（全13巻）

このたび白水社から「ルカーチ著作集」（全十三巻・別巻一）が刊行された。ルカーチは教条化された俗流マルクス主義を主体的人間の実践の指針として再建しようとする彼の思想性は政治と文学の対立の錯綜を超え独自の体系を構築している。ルカーチは、現実政治との関り合いから引退を強いられながらも、彼の思想的一貫性ともいうべき現実を止揚する社会総体を把握しようとする志向はその後もおとろえていない。その全体への把握の志向の萌芽において初期の「小説理論」以来、「歴史と階級意識」に至る強烈な求心力は、彼が示す人間の生活領域に対する幅広い理解を基礎としたに不現在の状況を止揚を志向する者にとって強烈な魅力を秘めている。

①「魂と形式」②「小説の理論」③「歴史小説論」④「ゲーテ」⑤「ハイネからトーマス・マン」⑥「世界文学におけるロシアのリアリズム」⑦「マルクス主義美学のために」⑧「リアリスム論」⑨「歴史と階級意識」⑩「若きヘーゲル」⑪「理性の破壊」別巻「ルカーチ研究」

現在的課題へ切り込む企画

「ゲバラ選集」「国境を越える革命」

全世界のプロレタリアートへのエルネスト・チエ・ゲバラの〝二つ、三つ：数多くのベトナムをつくれ、これが合言葉だ〟のスローガンは、反戦＝平和を一義的価値とせず、反戦を世界革命の現実化への方向として大胆に打出す。インターナショナルは国際革命宣言である。闘争の革命的な質的転換を表現している。

一方、一種のゲバラ・ブームとでも呼ぶべき情況が現出している。

「ゲバラ日記」が、朝日新聞社、みすず書房から発行され、ベスト・セラーを続け、以降、ゲバラを商品化したコマーシャル・ベースに乗せたゲバラの個別的著作なり同顧録なりが刊行〝第三世界革命〟は、いわゆる革命の隠絶と、結合への衝動の背反が、ゲバラの〈思想〉を成立させているとすれば、人民・農民・兵士の怒りの側へ下降させて対象化させる作業は、極めて現在的な課題であるだろう。

この課題に対して、ゲバラの革命的路線の評価をめぐって、議論がなされている。

〈ゲバラの思想＝革命路線〉をいちはやく「現在的な課題」として評価し、資料収集の困難性に制約されながら体系的に論文を意欲的に集大成し「世界革命運動情報」に本邦で初訳する一方、「国境を越える革命」の刊行は一種のゲバラ・ブームとも呼ばれている。

「ゲバラ選集」は